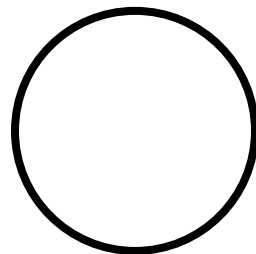


Newsletter

東京大学大学院人文社会系研究科
多分野交流プロジェクト研究ニュースレター
<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/tabunya/>

Dec. 6
2000



目次

巻頭エッセイ 幸運な遭遇.....	近藤 和彦
プロジェクト案内「環境—その自然と人為—」 環境と国土の価値.....	桑子 敏雄
プロジェクト案内「ギリシャ・ローマ研究の方法」.....	逸見喜一郎
プロジェクト案内「人間と価値：歴史意識」.....	小島 毅
プロジェクト案内「創造と発信：文化の環境と交流」.....	沼野 充義
後記.....	岸本 美緒

プロジェクト案内

創造と発信: 文化の 環境と交流

主査 沼野 充義

冬 月曜5・6時限

この演習は少々遅れて11月13日に開講し、それ以降、毎週月曜日午後5～7時に、法文2号館中3階多分野交流演習室で行なっています。近代文学や文化について、専門を越えて興味が交差し、対話が成り立つような「広場」を提供することを目標とした演習です。専門・学年を問わず、ご興味をお持ちの方の参加をお待ちしています。途中からの、あるいは特定の回に限った参加も歓迎いたします。お問い合わせは、スラヴ語スラヴ文学研究室 沼野 充義（電話 03-5841-3847、E-mail: mitsu@l.u-tokyo.ac.jp）まで。

今年度の学外からの客員教授・助教授は、三浦雅士（文芸評論家）、三宅晶子（千葉大学・ドイツ文学）、中村和恵（成城大学・広域英語圏文学）の3名の先生方です。また外国人研究者や芸術家などのゲストスピーカーにも随時来ていただいています。人文社会系研究科からは、柴田元幸助教授（英文学）、藤井省三教授（中国文学）を初めとし、様々な分野の教官の参加をお願いしています。

これまでの演習の記録

11月13日(月)

報告者 リトアニア・ヴィリニウス大学助教授（元文学部長）ケストゥティス・ウルバ博士「(特別講義)リトアニアの児童文学」(講義は英語、討議は英語およびロシア語、一部リトアニア語)

ウルバ博士はリトアニアきっての児童文学研究者。今回児童文学関係の団体の招待で日本に滞在中のところ、「リエトゥヴァの会」(リトアニア文化研究会)と共催で、今回の特別講義実現の運びになった。リトアニアはソ連時代にはロシアの影響下に組みこまれながらも、ヨーロッパの西と東のはざままで独自の文化を発展させてきた国であり、文化的感性が言わばもっとも純粋な形で現われるこの国の児童文学のあり方は、西欧や東欧を専攻

する立場から見ても極めて興味深いものである。ウルバ博士はリトアニアにおける児童文学の発展を16世紀から説き起こし、最近出版された美しい絵本の実例まで挙げながら現代に及び、じつに盛りだくさんのレクチャーになった。

リトアニアを初めとする沿バルト地方の研究は日本のヨーロッパ研究の死角になっており、残念ながら、大学の枠組みの中ではほとんど正規には研究・教育されていない。この分野での研究を今後どう発展させていくかは、われわれの大きな課題と言えよう。ちなみに、私（沼野）は1990年代初頭にヴィリニウス大学を訪ね、スラヴ・バルト語科の学科長に会ったことがあるが、その際、リトアニア側に日本の大学と交流を深めたいという熱意があることをひしひしと感じさせられた。学術協定の締結などの可能性も積極的に探っていくべきだろう。

今回の講義の実現に際しては、「リエトヴァの会」の皆様、特に畑中幸子教授（中部大学の文化人類学）と櫻井映子さん（言語学者、リトアニア語専攻、ヴィリニウス大学留学中ウルバ教授に師事）に特にお世話になった。厚くお礼申し上げます。なお講義のテキスト（英文）は、近く「リエトヴァの会」会報に掲載される予定。

11月20日(月)

参加者の自己紹介、今後の打ち合わせ

11月27日(月)

報告者 沼野充義（スラヴ文学） 「ニコライ・レーリッヒと20世紀ロシア文化の地平——画家・探検家・神秘思想家」（スライド使用）

20世紀ロシアが生んだもっとも多彩でもっとも神秘的な芸術家・思想家の一人、ニコライ・レーリッヒ（リョーリフとも表記する場

合がある）について紹介し、彼の生涯と作品にどのようなアプローチが可能か、同時代のロシア文化のコンテクストの中で検討を試みた。

今後の演習の予定

12月4日(月)

報告者 ヴァレーラ&ナターシャ・チェルカーシン「ソ連からロシアへ——帝国文化へのまなざし」（チェルカーシン夫妻は、ソ連、ドイツ、イギリスなどの「帝国文化」をテーマとして、写真やグラフィック、それらのモンタージュ、彫刻など、展示空間を活用した様々な芸術形式で製作活動を続け、欧米でも数々の展覧会やパフォーマンスを通じて広く知られている気鋭のアーティスト。自作の紹介・解説を交えながら、スライドとビデオを使つての講義。ロシア語、通訳つき）

12月11日(月)

報告者 三宅晶子（ドイツ文学・千葉大学助教授）「戦時下日本の記録映画」（ビデオ使用）

12月18日(月)

報告者 中村和恵（広域英語圏文学・成城大学助教授）「マオリ・カリブの千年王国運動」

(2001年)1月15日(月)

報告者 平野恵美子（大学院・スラヴ文学）「バレエ・リュスとロシアの画家たち」

1月以降の報告予定（日時は改めて掲示）

- ・ 柴田元幸（英文学）「アメリカ文学翻訳の実践と理論」（添削ゼミナール付き）
- ・ 毛利公美「ウラジーミル・ナボコフと映画・演劇」
- ・ 竹内恵子「ヨシフ・プロツキーとチェスワフ・ミウォシュ」

プロジェクト案内
人間と価値：
歴史意識
主査 小島 毅
水曜 5・6時限

本プロジェクトは、冬学期に毎週開講している。今年はテーマを「歴史意識」としたためか、思想文化史的内容の報告が続いている。10月18日には、たまたま来日中であった Benjamin A. Elman 教授に、現在研究中のテーマをもとに報告していただいた。この会は大盛況で、26名の参加者があった。

今号は締め切り日の関係で11月15日まで掲載する。12月は13日で終了し、1月にあと2回程度行う予定。

第1回 10月11日 聖徳太子は風水師？ —大陸風水説が古代日本に及ぼした影響について、聖徳太子伝説を手がかりに
水口拓寿（東アジア思想文化専門分野博士課程）

発表要旨：本発表では平安時代中期の『聖徳太子伝暦』等を手がかりに、中国に興った東アジア風水文化における古代日本の位相を検討した。太子は『伝暦』他の中で数々の風水的事績を示すが、そうした挿話の内容（殊に、成書時期の朝鮮で風水説内部に強められた譏異性）や来歴から見るに、朝廷は中国由来の占術を比較的原始型のまま受容した一方、但しそれらの中でも風水説は重用しなかったと推定されるのに対し、風水説には内容や担い手において朝鮮経由という文化的色彩が濃かったようである。さらに按ずれば、『伝暦』の個々の挿話ならぬ書物の次元では、非渡来系の貴族や知識人が撰者として伝承或いは考証されている。造園書『作庭記』など風水説の影響が指摘されるその他の書物も然り。平安人たちは、眼前の政情や朝廷の行使する「中国占術」を追認・補完したり、或いは抵抗したりするべく、朝鮮型の風水説や「戦略としての朝鮮」に着目していたのではないか。

討論報告：譏異性の強い風水説が他ならぬ朝鮮型だと言い切れるか、そもそも風水説の受容や採用の有無を如何なる基準で判定すべ

きか等について、論説の更なる確実性を求める方向で質疑が重ねられた。また、発表者が中国福建省ほかで風水文化の実地調査を行う者でもあることに関連して、過去と近現代における連続性についても議論が及んだ。

第2回 10月18日 格致学から科学へ
Benjamin A. Elman (カリフォルニア大学ロスアンゼルス校教授、特別ゲスト)

『大学』の八条目にある格物と致知の動詞をつなげた「格致」は、古くから自然学を表す語として使われていた。イエズス会士が将来した *scientia* も、中国語では格致と訳された。ただし、イエズス会士のいう *scientia* は近代的な意味での科学ではないし、その頃の中国の格致学は五行学や陰陽学を含んでいた。17～18世紀には、考証学者たちが西洋の学問を中国化していく。アヘン戦争後、プロテスタント系の知識が紹介されるが、それは産業革命を経たのちの *science* であり、従来のイエズス会の *scientia* とは別の世界の別の言葉であった。しかし、中国では当初、*science* を格致学と訳し続けた。したがって、当時の「格致書院」の意味は、朱子学を教える施設なのか、近代科学技術の学校なのか、一概には言えない。「科学」の語は明治日本から流入し、格致学に代わって定着していった。1923年の科学と人生観をめぐる有名な論争では、保守派も「科学」を西洋科学の意味で使うようになり、格致学という語はすでに忘れられてしまっている。

第3回 10月25日 中国思想史上の「近世」
伊東貴之 (武蔵大学人文学部助教授、連携教官)
かつて、日本の東洋史学界において、中国史の時代区分が論争の焦点になった。そのうち、有力な観点の一つとして、いわゆる「唐宋变革」説、ないし「宋近世」説という所説が存在した。時代区分それ自体が目的化する

ことは、論理的には、むしろ転倒した議論であろう。だが、私見では、一つの仮説としては、少なくとも哲学・思想史の領域においては、この時期にある画期が、確かに刻印されているように思われる。それでは、この画期の含意するところ、その思想史的な意義は、いかに説明されうるのであろうか？ 本報告では、まず、経学・歴史学・哲学思想などの、当時の士大夫たちの主要な関心のテーマに即して、若干の試論的な考察を展開した。ついで、広義の宋学の諸潮流のなかで、朱子学が最終的な「成功」を収めるに至った所以を検証した。その上で、朱子学以降の思想史に対する、従来のさまざまな研究上の視角を吟味・検討し、一つの新しい視座として、宋学以降の個人的な人性の陶冶・変革を目指す「氣質变化」論が、やがて理論的な隘路に直面し、より客観的で間主観的な「礼教」による規制へと倫理観が質的な転換を遂げた、との見通しを提示した。併せて、このことが、伝統中国の社会や思想・文化に齎した諸影響、また、若干の比較史的・比較思想史的な視点に関わる問題提起を試みた。

第4回 11月1日 清初における宋代士風論
岸本美緒 (人文社会系研究科教授)

本報告では、明末清初の動乱期を生きた王夫之と顧炎武の宋代士風論をとりあげ、その議論の基礎をなす彼らの秩序観につき、若干の問題提起を試みた。第一に、彼らの秩序観の核心をなす「風俗」「士風」の観念について、それが人間の集合的な行為によって形成されるものでありながら、人間の設計主義的な介入によってたやすく変えることのできない抗い難い「世の動き」としてとらえられていることを指摘した。第二に、王夫之の宋代士風論の特色をなす、正義派士大夫への激しい批判が、一見すると抗い難い世の勢に対する順応を主張するよう見えながら、その実、他

者の評価に流される日和見的精神への矯激ともいえる糾弾であることを述べ、正義派士大夫を高く評価する顧炎武との相違は、人々の心に潜む功利心やオポチュニズムを排撃する潔癖さの度合の如何に帰せられることを論じた。王夫之の場合、そうした立場を徹底するあまり、政治的な正しさの根拠は、何らかの積極的な政策よりも、内面的な倫理の固守に求められることとなる。最後に、顧炎武や王夫之に見られる、「亡国（王朝の滅亡）」と「亡天下」とを区別する議論に触れ、「亡天下」論が夷狄に対する民族闘争といった文脈でなく、内面的な倫理の固守によって危機にある秩序を維持しようとする、彼らの秩序観の特質との関係で理解されるべきものであることを論じた。

第5回 11月8日 宋人の歴史意識

小島 毅（人文社会系研究科助教授）

「唐宋変革」論を提唱した内藤湖南は、その変革が文化面においては意図せざる結果として生じたと述べている。宋の初期においては、唐の模倣が図られていた。しかし、建国後八十年の慶暦年間（1041-48）に新たな意識が誕生する。慶暦を画期とする史観は当時の人々自身によっていだかれ、その後も継承されて湖南の立論に至る。宋人の新しい歴史意識とは、秦漢から唐までを暗黒時代とみなし、自分たちはそれ以前の三代聖世に戻す運動になっているというものであった。彼らは、人間は正しい修養を積みば誰でも聖人になりうるとする気質変化論にもとづき、この世の真理（「道」または「理」）の把握に向けた自己規律を、学問に志す者に対して課す。漢代の儒者への評価も、それまでのように經学上の貢献度ではなく、自己規律の有無にしたがってなされるようになる。董仲舒は、今文春秋学者としてではなく、孟子の後継者として義利の区別を明確にした点で評価されるよう

になる。また、賈誼への評価も、司馬遷や班固のものとは異なった視角からなされる。漢代に対するこの歴史意識は、大枠としては元・明・清にも継承され、あるいは現代の思想史研究にまでいたる、暗黙の前提を提供している。

第6回 11月15日 『宋史』の編纂について

鈴木弘一郎（東アジア思想文化専門分野博士課程）

前近代の中国の歴代王朝では、新王朝が成立すると、その前の王朝の正史を編纂するのが伝統であった。元朝においても、『遼史』『宋史』『金史』の三史が編纂されたが、その成立までには、正統論争、皇太子を定めないことに起因する政情不安定、所謂「モンゴル至上主義」といった、他の王朝には見られなかった障害があり、完成は最後の皇帝の順帝の時代になってからであった。その修史事業には、江南の読書人が大いに寄与しているが、従来の研究では、中でも特に浙江の「金華学派」と呼ばれる集団の影響が大きかったとされる。だが、実際に修史作業に係わっていた「南人」を見ると、金華よりはむしろ江西・湖南方面の人士が多数を占めている。このことは、『宋史』の「道学伝」と「儒林伝」の分類に影響を与えているものと思われる。

討論においては、「正統」というのは中国的な華夷観念に根差した論理であるが、蒙古族の王朝としての元朝の legitimacy の根拠は何だったのか、「金華学派」という呼称が成立するのは後世のことであり、当時にこの名に値する「学派」が実在したのか、などといったことに関して議論が行われた。

プロジェクト案内「環境 ―その自然と人為―」

主査 松永 澄夫 / 木曜 5・6時限

環境と国土の価値 構造

文・桑子 敏雄（東京工業
大学教授）

東京工業大学価値システム専攻桑子研究室では、環境、生命、情報の問題が融合してゆく21世紀の価値の問題を分析するための枠組みを、理念、制度、意思決定の三極からなる「価値構造」と捉えている。この「自然と人為」の授業では、大学院生による「国土総合開発における公共性と風土性」（緒方三郎）と「戦後の緑化政策とその思想」（真田純子）の発表をふまえて、「環境と価値構造」（桑子敏雄）について考えを述べた。21世紀にわたしたちが遭遇する環境の問題をめぐっては、一方に地球規模のグローバルな問題が存在するが、他方ローカルな問題として国土空間の再編、あるいは環境政策の理念の問題がある。一連の発表では、「価値構造」の視点から現実を展開する諸問題に即しつつ、とくに戦後の国土政策にかかわる価値の問題を環境とのかかわりで論じたものである。

まず、「国土総合開発における公共性と風土性」（緒方）では、わが国の環境行政がその対象を従来の環境概念から風土とよぶべきものに広げ始めている傾向について、環境行政が「風土行政」へと変化していくプロセスとして述べた。

環境行政の「風土行政」への接近としてとらえることができる環境行政の総合化は、狭い環境観で環境問題をとらえることからの脱却である。たとえば、公共事業の多くは風土を対象にしているといって差し支えない。公共事業の推進・反対にまつわる議論は、自然環境だけにとどまらない風土を変えるのか、残すのかという議論である。吉野川第十堰建設に関する住民投票（平成12年1月23日実施）の事例では、防災と自然保護というふたつの価値の対立の問題がみられる。あるいは、莫大な建設費とそれを使わなかったときの他の用途の可能性、つまり予算制約のもとでの行政サービスによる効用の最大化と分配の問題としてとらえることもできる。このような

多様な価値の比較を含む問題は、環境行政ではなく、風土の概念が有する多面性を総合化する視点から取り組むべき問題、すなわち「風土行政」の問題である。行政がこのような問題を解決しようとするれば、行政の対象は拡大し、風土全体を対象とせざるをえない。そして、それは風土性の総合的評価というかたちでなされるだろう。近年の環境アセスメントの変化には、このような「風土行政」化の方向性をみることができる。(以上、緒方の発表内容)

つぎに、「戦後の緑化政策とその思想」について考える。(真田) 現在おこなわれている政策の多くは、ひとつひとつが個別の目的を果たすために行われる。しかし、その政策が社会全体の中でどう位置づけられるのかということがいつも考えられているとはいえない。その事例として、戦後の「都市緑化政策」をとりあげる。「都市緑化」はつねに「良いもの」というイメージでとらえられてきたが、その「良さ」のうしろで見えなくなってしまったものもあった。とくに公害のひどかった時期にそれは顕著である。

終戦直後「心の糧」のようなものであった緑は、「環境保全」「環境浄化」という、より理論的かつ積極的な機能を持たされた。しかし、この機能は同時に「環境破壊」の隠れ蓑にもなったのである。1960年代から、目にみえてきた「都市環境の悪化」は、とくに「都市緑化」が重要視されるきっかけとなり、1970年代にはいって「都市緑化」は制度化された。しかし、都市を緑化することは直接には問題の解決にはならなかった。

緑を増やすということそれ自体は、悪いことではない。工場を緑化して地域との融和を図ろうとしたことも、緑を増やすために大気汚染に強い樹木の研究を行ったことも、それらの木を販売したこともすべて、それらを行った人々は「環境のため」であると思ってい

ただろう。そして、それはたいがい好意的に受け入れられていた。

しかし、このような行為は結果的に環境破壊を静かに進行させることになっていたのである。都市内に緑という自然が求められるようになったのは事実である。しかし、それが何かの反動であるかぎり、「都市緑化」という目的を果たすことだけに満足することには大きな危険があった。(以上、真田の発表)

以上の発表は、理念、制度、意思決定という「価値構造」研究の枠組みに即して行っている研究であり、まとめとして、桑子は、この価値構造そのものについての考察を行った。価値構造とは、社会のなかに生じるさまざまな問題を解決するために立てられる社会の理念、それを具体化したものとしての制度、さらに、その制度のなかで価値判断、意思決定する個人の間の関係を分析するために考案された研究のための枠組みである。制度内での個人の価値判断は、制度に実現された価値基準に則して行われるのが常であるが、環境の変化によってその基準が十分機能できない場合では、個人は、その制度内の価値基準に即して判断すべきか、それともそこから逸脱すべきかという葛藤のなかに置かれることになる。制度逸脱的価値判断から新しい状況に即した理念が提案されるとき、その理念の基礎となる理論が構築されて、多数のひとびとに支持されると、それを旧制度にかえて制度化するというインセンティブが働くようになる。このダイナミックな関係を見据えて、現実と制度内的な価値基準の制約を分析し、新しい理念構築に資するのが「価値構造」研究の役割である。

巻頭エッセイ

幸運な遭遇

文・近藤 和彦

1998年9月の初め、オクスフォードでのこと。この大学都市の中心から北へのびるパンベリ・ロードを車でほんの数分行ったところに住むM氏の一家を訪ねた。カンリフ・クロースという緑に囲まれた住宅地に2・3階建ての低層住宅がならんでいた。M家の皆さんと近況など話しているうちに、その午後に近所で開かれるティーパーティに一緒に出てみましょうということになった。これが幸運な遭遇をうんだのである。

芝生にいくつかテーブルをしつらえて、サンドイッチ、ケーキや果物、紅茶にワインがならぶ。三々五々集まる人は、みな名札に自分の名を書きつけてそれぞれ自己紹介する方式。つまり、近隣に住んでいても名を知らない人が多い間柄で、こうした好機に知り合おうという催しなのだ。M氏のように大学関係の人が1年単位で出入りすることも少なくないこの地区の知恵かな、と思いながら紅茶の行列に並んだ。にこやかにお茶を注いでくれる上品な婦人の名札をみると、Mary Habakkukとある。ハバカクとは、どこにもある苗字ではない。旧約聖書に出てくるユダヤの名というくらいは知っている。もう一人名を知っているのは、著名な経済史の泰斗だ。まさか、とは思ったが、話のきっかけになると考えて、尋ねてみた。「かの有名なハバカク教授のご姻戚でしょうか。」

この初老の婦人は体の向きを転じて、「ジョン、あなたのこと、有名な教授なのか、というお尋ねよ。」

それはちょっと違う、と慌てるわたしの方に近づいて来てくださったのが、他ならぬサー・ジョン・ハバカクであった。面識はなかった。ただ、彼が若くして発表したイギリスの土地所有および貴族についての論文はあまりに有名であるし、また戦争中は別にして、ケインブリッジとオクスフォードのもっとも恵まれたポストを歴任したうえ、1970年代に

はオクスフォード大学総長（Vice Chancellor）をつとめ、王立歴史学会会長に就いた。憚りながらイギリス史を研究しているわたしに、そうした知識はあった。だが、わたしの前に現れたサー・ジョンは、あまり背の高くない、がっしりした体格の気さくなおじさんであった（あとで調べると1915年5月生まれだから、83歳であった。それよりずっと若く元気な印象だ）。急いで自己紹介し、またM氏も初対面とのことで、一緒にちょっと即席のインタビューを試みた。

意外なことに、このイングランドの知的世界を代表するはずのエリートは、ウェールズの炭鉱町の公立学校から（つまり比較的貧しい階級の出身で）奨学金をえてケインブリッジ大学に進学したのだった。歴史学を専攻し、21歳、最優秀の成績で卒業したハバカクは、オクスフォードの大学院を志望し、まずは前々から尊敬していたG. D. H. コールを訪ねたという。

コールといえば、日本では社会主義思想史や労働運動史などの著作で有名だが、オクスフォードの「社会政治理論」教授であり、論壇で活躍し、労働党の政策決定に関与し、社会教育にも従事し、じつに多作で、探偵小説も書いている。八面六臂の活躍をした左翼のヒーローであった。憧れのコール先生に面談できるというので、1930年代の後半、胸をいっぱいにして研究室を訪ねたハバカク青年にたいして、どうしたことだろう、コールは最悪の印象しか残さなかった。当然ながら忙しいとしても、エリート臭の芬々たる所作、偉ぶった態度。ハバカクの論文から伺われる人柄は、感情や政治性をあらわにすることなく淡々と事に即した実証研究をこなしてゆく、大人の研究者である。そのハバカクが、60年あまり後、初対面の日本人に述懐したのは、かなり率直で辛辣なコール評であった。

その後ハバカクは23歳でケインブリッジ大

学ペンブルック学寮の教員（フェロー）に迎えられ、戦中は外務省および通産省に勤務したが、1950年には、オクスフォード大学のオールソールズ学寮、チチリ経済史講座の教授に迎えられた。破格に若い、35歳であった。そのとき同じ学寮のチチリ社会政治理論講座の教授職にあったのは、コールである。

オールソールズ（諸魂）学寮とは百年戦争における死者を悼むためにヘンリ6世のとき（15世紀）にできた学寮（社団）で、中央図書館（ボドリアン）のすぐ東に位置しているが、学生は受け入れず、有望な若手研究者と代表的な講座、そして招聘研究者だけで構成する、特権的なオクスフォードのなかでもとくに特権的な学寮である。チチリ講座というのは、王とともに学寮を創始したキャンタベリ大司教チチリを記念した冠講座で、中世史、経済史、戦争史などの正教授を擁し、イギリス学界を代表するポストだと自負している。

1957年にコールが68歳で退任するまで、二人はこの学寮のチチリ教授として、26歳違いの同僚であった。ということは、二人は学寮会議で同席したばかりでなく、昼食やディナー、コーヒーなどを同じ場所ですったのである。オールソールズの構成員（フェロー）は現在50名をこえる。正確には知らないが、当時はこれよりずっと少なかっただろう。学寮という共同体にあって、顔をあわせながら黙っていることはできない。最初はまず天気について、そして料理や果物やワインについて、調度について、無難な話題を選ぶことは可能だ。しかし、7年間のうちには政治と学問、信仰と科学、文章・人物の品定めなどに話がおよび、互いのプライバシーも知れてしまうことは避けられない。

二人は気質も学者としてのスタイルも違う。コールの著書を数え上げたことはないが、優に数十はこえるだろう。対照的に、ハバカクは研究論文は少なくないが、物書きではない

から、単著は70歳を記念して編まれた自選論文集をいれて3冊、薄い講義録を含めても計5冊である。これほどの学者にしては驚くべく少ない。むしろ『経済史評論 (ECHR)』誌の編集や、ケインブリッジ大学出版会の講座『ヨーロッパ経済史』の企画監修などで、その手腕が発揮されたと見るべきだろうか。日本で勝手に彼の論文を編んで出版した訳書が2冊あるというのも、おもしろい現象といえる。

かたや炭鉱町から家門もハッタリもなく、才能だけでオクスフォードの教授となったハバカク。かたや高級官僚の家に育ち、政府やマスコミ、学界の内情をよく知る根からのエリート、コール。両者ともに抜群の才能に恵まれていたのだが、ハバカクはリベラルな実証史家として学界に生き、コールは左翼知識人・物書きとしてひろく活躍した。59年、70歳を前に亡くなったコールを追悼して刊行された『労働史論集』という重要な論文集に、ハバカクは寄稿していないし、言及もされていない。

オクスフォード大学というと、古色蒼然たるイメージがあり、とりわけその図書館には、いかにもルネサンス・人文主義の時代を彷彿とさせる雰囲気がある。だが、ただ古くて権威的なだけでは、世界中から人を惹きつけることはできない。ハバカクさん本人にも、彼をチチリ教授として迎え、総長に選んだオクスフォード大学にも、イギリスの古き良きリベリズム、日本語にすると「大人の度量」を感じた。

プロジェクト案内

古代ギリシャ・ローマ 研究の方法

主査 逸身喜一郎

金曜 5・6時限

顔合わせの第0回を別にして、月1回ペース・全7回のプログラムは、すでに第6回まで終わってしまった。せっかちな私など、はや年度末気分である。哲・史・文の方法の違いを浮かび上がらせることに意義をおくという我々の試みは、まずは成功といえる。2巡目が今から期待されるとまでいうと、自画自賛にすぎるか。

発表を受け持った教官は、意識的に 他 分野性を、あるいはひとの領域に踏み込むがごとく差異を強調することで、あるいは自分の分野の秀でた厳密性、もしくは大局から俯瞰した妥当性を暗黙裡に誇示することで、攻撃・防衛、個々人の性癖の違いはあるものの明らかにしようとした。毎回、何らかの感慨を、話した者・聞いた者それぞれに、事後に残しての散会となる。学生諸君の質問が、発表内容そのものへの問いかけが多くなることは、きわめて健全な対応だと思われるし、どうしても「方法」を意識せざるをえない教官が、専任・連携それぞれに、率直すぎる疑義の吐露、あるいは皮肉の応酬となるのも、これまた当然といえよう。

対立軸とはいささか穏当ではないかもしれないがあえてこのことばを使うと、我々の「多分野交流」には、いくつかの顕在／潜在した対立軸がある。まずは当然ながら 他 分野間、すなわち哲・史・文の応酬。これはこのプロジェクトのそもそもの柱であるから今回あらためて説明の要はなかるうが、前回のニューズレターで連携教官の神崎さんも強調されている。ついで同一分野の専任・連携教官の間での、 他 分野の眼を意識した相互批判。これについてもすでに私も神崎さんも指摘した。

もうひとつは世代間の差異である。安易な世代論に組するわけではないが、ギリシャ語・ラテン語の「学習環境」の違いはやはり大きい。ギリシャ・ローマを対象とするかぎ

り、今の学生諸君は、哲・史・文、どの分野であっても、ギリシャ語・ラテン語が読めて当然であるし、そのための訓練の場は多々ある。対して連携3教官の時代はいざしらず、少なくとも専任教官の世代にとっては、この大学の中にあっても古典語の演習は数えるほどであったため、あちこち門戸を叩かずにすまなかった。付言すると昨今とはことなり、欧米の研究者に接することも、千載一遇のチャンスとしかいいようがなかったほどにまれであった。近年、学生諸君がややもすると微視的になる（というより、そう教官がおもいがちになる）のは、学問それ自体の「先鋭化」を思えば当然であるけれども、ひとつの専攻だけで「事足りる」ようになっていくこともまた、あるいは原因のひとつかもしれない。（嫌みをいうと、反省のない微視的な態度はときに途方もない飛躍を許してしまうものである。）

そのあたりは単純に解決できないし、そもそも研究者、誰にとっても難問である。しかし問題そのものの無知はよくない。多分野交流演習その場では格段の反応がなくとも、種は蒔かれたと期待する。

前回は連携教官の神崎さんに寄稿をお願いしたので、第3回以降の発表の要約ができなかった。以下は逸身の独断にもとづく要旨である。

第3回(6月23日)

島田 誠 『誰がアレナに立ったのか?—歴史学と史(資)料—』

歴史研究で用いる史(資)料はそもそもが多様であるのみならず、文字史料の場合、著者の意向ないしコンテクストをあえて無視して、「痕跡」としてテキストを利用することもある。その「利用」の一例として、剣闘士試合に出場した者が、奴隷のみならず自由人、

それも身分の高い者がいたことを、どうやって史料から読みとれるかを実際にやってみせた。

第4回(7月14日)

片山英男 『(いわゆる)紀元前5世紀末の音楽の変革』

音楽史は紀元前5世紀に、ギリシャ音楽が過激な変容を遂げたという。M. L. West があげている史料に逐一あたってみることで、たとえ結論がそうなるにせよ、その論拠はいかに「か細い」かを例示してみせた。

第5回(10月20日)

神崎 繁 『三つの事例—どうして哲学者は「詩」を誤解できないか—』

ホメーロス(『オデュッセイア』)・エウリーピデース(『メーデイア』)・ウェルギリウス(『アエネーイス』)の3つの箇所を、同一「哲学者」(プラトン・アウグスティヌスならびにストア派)が、ちがったところで引用しているときに、その解釈に矛盾があるようにみえるその理由は何か。もとの文脈での意味の厳密さに拘泥せず、ときに意味の幅を大きく、ときに小さくするからではないか。(この部分、逸身の要約にとりわけ問題がありそうである)

第6回(11月17日)

大芝芳弘 『諧謔の構図—カトゥッルス第1450歌の「詩学」—』

カトゥッルスは自分もその中心人物のひとつである「新詩人派」の理念を、実際の詩の中で実践させてみせている。ことばのひとつひとつには、表面の意味と相俟って、理念ないし思潮へのほめかしが託されている。単に学識のみならず、機知と戯れ・諧謔をそうした箇所にもてとればこそ、従来、よく意味が読みとれなかった詩句の機能もみえてくる。

後記

冬が近づき、冷え込む夜も多くなってきました。朝の光を受けてあたり一面黄金色に輝くような趣を見せていた銀杏並木も、このニューズレターがお手もとに届くころには、かなり葉が落ちていることでしょう。

さて、今号は、近藤和彦先生に巻頭エッセイをご執筆いただきました。「おや、いつもと違うぞ」と手にとって、興味津々、読了なされた方も多いことでしょう。これからも、多分野的交流や、それに伴う遭遇の驚きを伝えてくれる、楽しいエッセイの掲載を目指していますので、よろしくお願いいたします。お忙しいところ、快くご協力くださいました近藤先生に、厚く御礼申し上げます。

各プロジェクトもますます順調に進行中ようです。5・6限に行われることの多い多分野交流演習では、日の短い今ごろは、始まるときからすでに暗く、帰り道も北風が身にしみるかもしれませんが、それだけに、ちょっと寄り道の「アフターセッション」も議論がいっそう盛り上がるのではないのでしょうか。

今年度も終盤に近づき、主査の皆様には事務関係でもいろいろとお手数をおかけすることになると思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。

(ワーキンググループ座長 岸本美緒)

「多分野交流ニュースレター」
第 30 号

平成 12 年 12 月 6 日発行
東京大学大学院人文社会系研究科
多分野交流プロジェクト研究
ワーキンググループ事務局発行
責任者 岸本 美緒
TEL: 03-5841-3898

連絡先 情報メディア室
TEL: 03-5841-3880
FAX: 03-5841-8949

Edited by
Kaori Domae
Noboru Koshizuka

BIT-DESIGN